



TITLE:

Prevalence of gambling disorder and its correlates among homeless men in Osaka city, Japan( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

Hwang, Chiyong

---

CITATION:

Hwang, Chiyong. Prevalence of gambling disorder and its correlates among homeless men in Osaka city, Japan. 京都大学, 2023, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2023-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k24510>

RIGHT:

DOI: 10.1007/s10899-022-10121-x Reproduced with permission from Springer Nature.

京都大学	博士 (医学)	氏名	黄 智 暎
論文題目	<b>Prevalence of gambling disorder and its correlates among homeless men in Osaka city, Japan</b> (大阪市のホームレス男性におけるギャンブル障害の有病者割合とその相関因子)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>背景：商業化されたギャンブルが世界的に普及するなか、いくつかの先進国では、ホームレスの人々におけるギャンブル障害の有病者割合が一般集団よりも高いことが報告されている。しかし、この集団におけるギャンブル障害の関連因子については十分にわかっていない。本研究の目的は、日本のホームレスの人々におけるギャンブル障害の有病者割合とその関連因子について探索することである。</p> <p>方法：2018年12月30日から2019年1月4日にかけて、大阪市による越年対策事業で緊急シェルターを利用していたホームレス男性265名を対象に、本調査を実施した。2017年度の『国内のギャンブル等依存に関する疫学調査』と同じ構造化質問票を使用し、そこにホームレス経験と飲酒・喫煙に関する質問項目を加え、調査員が1人ずつ聞き取りを行った。South Oaks Gambling Screen 20点中5点以上を「ギャンブル障害」と判定し、これまでの人生（生涯）と過去1年間におけるギャンブル障害該当者の割合を算出した。また、「ギャンブル障害（生涯）」の関連因子を探索するために、多変量ロジスティック回帰解析を行った。参加者からは口頭および文書にてインフォームド・コンセントを取得し、調査にあたってはプライバシーに配慮し、匿名性を担保した。</p> <p>結果：112人（42.3%）が本調査に参加したが、回答内容が一貫していない9名の参加者を除外し、103名（有効回答率38.9%）を分析対象とした。ギャンブル障害に該当した者の割合は、生涯では43.7%（95%信頼区間[CI]:34.5-53.3%）、過去1年間では3.9%（95%CI:1.5-9.6%）であり、2017年の『国内のギャンブル等依存に関する疫学調査』の男性で確認された有病者割合（生涯6.7%、過去1年1.5%）と比較して、特に生涯における割合が高かった。「ギャンブル障害（生涯）」と関連する因子は、「最初にホームレス状態になってから20年以上が経過」（調整オッズ比[AOR]:4.97, 95%CI:1.50-16.45）、「5回以上のホームレス経験」（AOR:4.51, 95%CI:1.06-19.26）、「20歳未満からのギャンブル開始」（AOR:4.69, 95%CI:1.46-15.07）、「ギャンブル問題をもつ人の身近な存在」（AOR:5.85, 95%CI:1.96-17.41）、「婚姻（離婚・死別）歴がある」（AOR:3.13, 95%CI:1.00-9.81）であった。</p> <p>結論：ホームレス状態の人々が生活の再建とその安定を目指すとき、ギャンブル障害の存在やその再発は、ホームレスの長期化あるいは再びホームレス状態に陥るリスクになることが予測される。ホームレスの人々は複数の問題を併せ持つことが多いため、包括的な支援プログラムの中にギャンブル問題への対応を含める必要がある。また、未成年からのギャンブル開始やギャンブル問題を持つ人の身近な存在がギャンブル障害との関連因子であったことに留意し、集団レベルの予防策を検討する必要がある。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、大阪市にあるシェルターを利用するホームレス男性におけるギャンブル障害者の有病割合を明らかとし、ギャンブル障害の関連因子について探索することを目的とした横断研究である。2017年度の『国内のギャンブル等依存に関する疫学調査』と同じ構造化質問票を使用し、そこにホームレス経験と飲酒・喫煙に関する質問項目を加え、聞き取り調査を行った。ギャンブル障害の判定はSouth Oaks Gambling Screen 20点中5点以上とし、ギャンブル障害の関連因子の探索には多変量ロジスティック回帰分析を用いた。

分析対象者103名（有効回答率38.9%）におけるギャンブル障害の有病割合は、生涯では43.7%（95%信頼区間[CI]:34.5-53.3%）、過去1年間では3.9%（95%CI:1.5-9.6%）であり、2017年の全国調査と比較して高いことが確認された。「ギャンブル障害（生涯）」の関連因子は、「初回ホームレス状態開始から20年以上経過」（調整オッズ比[AOR]:4.97, 95%CI:1.50-16.45）、「5回以上のホームレス経験」（AOR:4.51, 95%CI:1.06-19.26）、「20歳未満からのギャンブル開始」（AOR:4.69, 95%CI:1.46-15.07）、「ギャンブル問題をもつ人の身近な存在」（AOR:5.85, 95%CI:1.96-17.41）、「婚姻歴あり」（AOR:3.13, 95%CI:1.00-9.81）であった。

以上の研究は、日本において初めてのホームレスの人々を対象としたギャンブル障害の疫学研究であり、ホームレス支援およびギャンブル障害の公衆衛生対策に寄与するところが多い。したがって、本論文が博士(医学)の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、令和4年12月2日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められた。

要旨公開可能日： 年 月 日以降